

実践報告

看護大学生は海外体験から何を学ぶのか？ 短期海外研修プログラムに参加した学生のラベルより

川北直子¹⁾，小笠原広実¹⁾，遠藤恵美子²⁾，Eric Larson¹⁾，小河一敏¹⁾

【抄録】

本稿は、宮崎県看護学術振興財団助成による試験研究助成事業「看護大学生の海外体験から得られる学びについて」の中で、宮崎県立看護大学国際交流委員会が企画・実施した5つの短期海外研修プログラムについて、「学生の学び」という視点から分析し、今後の課題について検討するものである。プログラムに参加した学生が現地で記入したラベルを、企画・運営者および本学教員という立場から読み返し、教員側が期待したプログラム効果と実際に学生が記述したラベルを比較した。特に、プログラムの種類（看護講義・施設見学型プログラムと異文化理解型プログラム）や滞在形態（ホームステイと大学寮やホテル滞在）とラベルの特徴との関係に焦点を絞り、ラベルの分布を概観し、補足的コミュニケーションを必要とするラベルの分析を行った。また、記述に見られる学生の実事と異なると思われる認識について、どのような特徴があるのか分析した。その結果、教育的効果を期待して企画したプログラムも、ただ実施しただけでは学生が目の前の事実を意識化しない可能性が高いことがわかり、随行教員による補足的コミュニケーションの必要性が示唆された。また、ラベルの記述に見られた学生の実事の捉え方の特徴として、「異文化」のとらえ方には3種類あり、海外と日本と比べている例の他に、自分の日常生活の場と異なる生活環境を「異文化」ととらえている例、出会ったことのない個に「異文化」を感じている例があることがわかった。今後の課題として、次の点が見えてきた：1) プログラムの種類と滞在形態と随行教員の役割の効果的な組み合わせについての検討が必要である。2) プログラム期間中のラベル記述と共有を継続し、学生の目の前の事実の意識化や事実と異なる認識や行き過ぎた一般化の修正へ向けた援助を行えるよう、随行教員の位置づけを明確にすることが重要である。

【キーワード】 看護大学生，短期海外研修プログラム，プログラム構成型，滞在形態，随行教員の役割

1) Naoko Kawakita, Hiromi Ogasawara, Eric Larson, Kazutoshi Ogoh：宮崎県立看護大学

2) Emiko Endo：武蔵野大学

I はじめに: 宮崎県立看護大学短期海外研修プログラムの目的と概要

本学の短期海外研修プログラムは、国際交流委員会が宮崎県看護学術振興財団の助成を受け、試験研究助成事業「看護大学生の海外体験から得られる学びについて」（2006-2008年度）の中で学部学生を対象として企画され、5つのプログラム（資料1）が実施された。

一般に看護学生を対象とした海外プログラムの多くは、現地医療制度や看護に関する講義、病院・医療機関の見学を中心としたものである。しかし、多くの短期海外研修プログラムの対象は、看護学生といってもまだ看護実習体験も乏しく、国内の看護や医療現場の状況についての理解が浅い学部学生がほとんどである。このような学生たちが、ただ海外の看護事情に関する講義や現地医療機関の見学を体験しても、比較の土台となる国内医療・看護に関する知識と経験に乏しく、正しい理解ができないのではないか。また、現地での日常の生活背景を知らない学生が医療現場のみを見つめても、わずかな知識を自分の生活背景での経験で補って、それを現地の看護と合わせるような見方になってしまうのでは、といった疑問があった。また、看護者として他者の生活をみつめ整えるための力をつけている段階の学生にとっては、異文化に触れることにより生活観や人間観を広げる体験も大切ではないか、と考えた。このような考え方に基づき、学部生向け短期海外研修プログラムを企画した。

企画した教員側は次のような効果を期待した：

- ①生活に関する表象像の広がり： 異なる生活習慣（食・排泄・衣・清潔・日課など）や気候の中で暮らしを体験することにより、生活観の巾を広げる。
- ②自己と他者の違いに気づく： 異なる社会情勢・歴史・宗教などのなかで形成されてきた価値観（健康観・家族観・職業観など）にふれることにより、

自己を見つめなおすきっかけとする。

- ③相手の思いを知るとはどのようなことか： 言葉の異なる人々とコミュニケーションをとるなかで、言語表現をこえた心のつながりや、思いの共有をしていく体験を得る。

出発前には、3回の事前学習会を開き、海外旅行とプログラムに関するオリエンテーション、現地に関心を高めるための参加者による学習内容の共有、各プログラム参加に必要な準備などを行った。また、参加者の関心をプログラムに取り込むための話し合いも行った。現地では、参加学生は毎日「心が動いた事実」についてラベルを起こし、他の参加者と随行教員と共にラベルを共有する場を持った。

各プログラムに随行教員1名を派遣し、学生のラベルの記入と共有の場を持つこと・非常時の対応・必要に応じて運営者との連絡を役割とした。

2007年度は国際交流委員が随行し、以降、助手・助教・講師といった若手教員から希望を募り、随行した。

本稿の目的は、現地で学生が記入したラベルを、企画・運営者、および本学教員という立場から読み返すことにより、看護大学生のためのよりよいプログラムづくりの方向性を見出すことである。

II 分析の対象と方法

1 素材：参加者が記入したラベル

本報告の素材とするラベルを参加者に記入させた主目的は、学生が現地で体験から得られる気づきを意識化すること、さらに、参加者の間で心が動いた事実を共有することにより、個々の見方をさらに広げることである。

ただし、今後のよりよいプログラム運営の検討のため、実施したプログラムから学生が何を学びとるのかを知る資料として、ラベルの内容を本報告にも使用することを参加者に事前に説明し、許可を得た。

学生には、生活・人間・生活習慣・異文化・社会・

健康・コミュニケーション・価値観など、海外で異文化にふれ「心が動いた」と感じた事実について、ラベル（7.5cm×10cmの罫線入りメモ用紙）に、第3者に場面が描ける事実の描写とどのように心が動いたかを書きとめるよう、事前学習会の中で簡単に説明した。心が動いた事実は1内容につき1枚のラベルに記入することとし、サンプルを示した。

2 分析対象

5つの短期海外研修プログラムに参加した学生のうち、研究目的に同意した学部学生12名から241枚のラベルを回収し、分析対象とした。

たった1週間の体験プログラムなので、ここでいう学生の「学び」とは、体験によって学生に何らかの長期的変化が起こる、といったことまでは含まず、あくまでも「目の前の事実が学生の意識にのぼること」、つまり目の前の事実「心が動いた」と学生自身が感じ、そのことをラベルに記述しようという意識が働いた、ということまでをさす。

3 分析方法

回収したラベルを、3つの視点から分析した。

視点1： 期待したプログラム効果と実際に学生が意識化した事実

まず、企画者側が「プログラム参加で期待される効果」として立てていた3項目の「学び」の柱の下に、企画者が想定した下位項目を立てた。それらの項目と学生が記入した内容とつきあわせ、実際に学生のラベルにどのように表れているか、という視点でラベルを分類した。企画者が想定した項目に含まれないラベルについては、新たに項目を加えていった。

企画者が「期待する効果」と想定しながらラベルには記述されなかった項目は、実際には学びの機会がなかったか、あるいは事実直面しながら意識化されていないかのいずれかであろう、という前提で、ラベルを概観した。

視点2： プログラムの形態とラベルの特徴

実施したプログラムの形態によって、ラベルの特徴が出るかを、①プログラムの型（異文化体験型／講義・施設見学型）、②宿泊形態（ホームステイ／大学学生寮／ホテル）の2点に焦点をあてて概観した。あらかじめ、次のような結果を想定していた。

- ・講義・見学型では学部生ゆえの看護の知識の乏しさからくる誤った解釈がラベルに現れるのではないか。
- ・異文化体験型プログラムのほうが、幅広い種類のラベルが見られるのに対し、講義・見学型プログラムでは、健康・医療・教育などに気付きが集中するのではないか。
- ・ホームステイによる宿泊では、生活に関する表象像の広がりを表すラベルがより多く見られるのではないか。

視点3： 学生の事実のとらえ方の特徴

目の前の事実は意識にのぼり、ラベルに記述しているが、経験や知識の不足によりその事実のとらえ方について修正が必要と思われるラベルを取り出し、どのような傾向があるのか観察した。

III 結果

1 回収したラベルの記述内容にもとづく分類

表1は、実際に学生が記述したラベルがどのような内容についてであったか、分布の概要を示している。プログラムによって回収したラベルの枚数自体異なるため、この表の数字そのものを比較することには意味がないが、食の項目のように学生が反応しやすい項目と、全く反応のない項目の違いは多少見える。以下、具体的なラベルも例示しながら、学生の「学び」にどのような傾向があったのか分析する。

表1 学生が記述したラベルの分布
生活に関する表象像の広がり

学びの 種類	プログラム# 型 滞在形態	プログラム1 異文化体験 大学寮 (韓国)	プログラム2 異文化体験 ホテル (タイ)	プログラム3 異文化体験 ホームステイ (韓国)	プログラム4 異文化体験 ホームステイ (韓国)	プログラム5 講義・見学 大学寮 (タイ)
食		15	1	8	4	5
排泄		0	1	0	1	0
衣		0	0	1	0	2
住居		1	0	1	0	0
清潔・衛生		2	1	1	1	0
日課・定期的習慣		1	1	2	0	0
物価		5	2	2	1	2
交通		2	2	4	4	8
健康・美容・医療		0	0	0	3	6
制度・社会的環境		8	0	8	9	5
経済		0	1	0	0	1
教育・学校・学生生活		1	0	1	0	6
動物・ペット		0	0	0	0	3
商業		5	0	3	3	0
気候・自然・地形・地理		0	0	1	1	2
世界の中の位置づけ		0	0	1	1	0
言語・文化・歴史		15	0	9	9	1

自己と他者の違い・共通性に気付く

学びの 種類	プログラム# 型 滞在形態	プログラム1 異文化体験 大学寮 (韓国)	プログラム2 異文化体験 ホテル (タイ)	プログラム3 異文化体験 ホームステイ (韓国)	プログラム4 異文化体験 ホームステイ (韓国)	プログラム5 講義・見学 大学寮 (タイ)
健康観		0	0	0	1	0
家族観		1	0	2	0	0
子育てのあり方		1	1	1	0	1
職業観・働き方		1	2	1	1	2
歴史観		1	0	0	0	0
宗教観・信仰心		0	0	0	0	2
感情表現・感情のツボ		0	0	2	1	0
物の使い方		0	0	1	0	0
金銭感覚		0	2	0	0	0
人生観		2	0	0	0	0
対人・コミュニケーション		7	0	1	0	2
教育・学習観		3	0	0	0	2
異性・恋愛観		3	0	0	1	0
愛国心・忠誠心		3	1	1	0	0
外国語・異文化への関心		5	0	3	1	0
美容・ファッションのあり方		2	0	0	3	0
道徳観・マナー・感覚		4	0	4	2	1
しぐさ・姿勢		1	0	0	0	0
生活習慣		0	0	1	0	0
時間の感覚		0	1	0	0	2
色彩感覚		3	0	3	1	1

相手の思いを知るとはということか

学びの 種類	プログラム# 型 滞在形態	プログラム1 異文化体験 大学寮 (韓国)	プログラム2 異文化体験 ホテル (タイ)	プログラム3 異文化体験 ホームステイ (韓国)	プログラム4 異文化体験 ホームステイ (韓国)	プログラム5 講義・見学 大学寮 (タイ)
コミュニケーションのあり方		13	0	7	1	8
排泄		4	0	0	1	0
衣		8	0	8	1	0
住居		3	0	1	1	0
清潔・衛生		4	0	1	0	0

2 プログラム構成の違いによる学生の気づきの傾向

1) 看護講義・施設見学型プログラムと異文化理解型プログラム

異文化体験型プログラムと講義・施設見学型プログラムを比較することの目的は、どちらがより適切である、と議論することではない。よりよいプログラムづくりを目指すために、各プログラムの良さだけでなく、不足しがちな点も理解しておくこと、また参加者が提供した体験をどうとらえるのかを理解しておくことが比較の目的である。

前節の表1を見ると、生活の表象像の広がりのうち、食、物価、交通、制度・社会的環境、言語・文化・歴史についてはどちらの型においても学生の心が動きやすい項目であることがわかった。「自己と他者の違い・共通性に気付く」の中の職業観・働き方、道徳観・マナー、色彩感覚、「相手の思いを知るとはどういうことか」の中のコミュニケーションのあり方についての記述がほぼ共通して見られる。

異文化体験型プログラムのほうが幅広い種類のラベルが見られるのに対し、講義・見学型プログラムでは、健康・医療・教育などに気付きが集中するのではないかと、という予想に関連して、健康・美容・医療についてのラベルは、当然ながらプログラム5（講義・見学型）に特徴的に多く見られた。プログラム4（異文化体験型）であつた2件は、韓国のサウナ・あかすりについてのものであつた。一方、講義・施設見学型プログラムでは、予め企画者が想定した項目のうち、排泄、住居、清潔・衛生、日課・定期的習慣についての記述は0であつた。講義・見学型プログラムでは、日常の生活を観察することによって次第に身につく生活背景の理解の機会が少ない、ということは予想通りであつた。また、自己と他者の違いの中の健康観、家族観、歴史観、生活習慣の違い、など多くの項目の記述は0であつた。

では、異文化体験プログラムでは幅広い種類のラベルが見られたかということ、プログラムによってもばらつきがあり、必ずしも異文化体験プログラムの効果がラベルに表れた、とはいえなかつた。さらに、

講義・見学型でも、食、衣、物価、交通、制度・社会的環境、教育・学校・学生生活、動物・ペットなどについての記述は見られた。

前述した通り、回収したラベルの枚数自体にもばらつきがあり、学生数もラベルの総数も少ないデータで数を比較しても意味がない。また、学びの機会があつたのか学生が目の前の事実を意識化できなかったのかについて、数字では判断できない。しかし、少なくとも、どのようなプログラムを実施しても学生が自立して意識化しやすい項目があることはわかつた。また、この表から期せずして見えたことは、ただ異文化体験プログラムを通して生活に関する様々な現象を体験させる機会を与えただけでは、目の前の事実が意識化されないことが多い、ということであつた。

次に、看護の知識や臨床経験がほとんどない学部学生が、生活背景の観察や理解なしに現地の医療・看護を見ても、自分自身の育った生活環境と訪問先の医療・看護状況を比較する、といったずれた認識を持ってしまう、という予想に関連して、次の2つのラベルは、未学習の内容に関する施設見学のときに学生が記述したラベルである。

午後から、タイの精神病院へ行った。タイの精神病院はとて大きかつた。庭が広く、散歩しているだけで、気分が良くなり、穏やかな気持ちになれそうな気がした。けれど、大きな部屋にたくさんのベッドが並んで、ナースステーションから格子越しに常に見られている環境で、精神看護にも身体同様目を向けるようになり、治療より予防、病院より地域、家庭に戻していく、という考え方は、タイと日本は同じで、メンタルケアの医療は進んでいることがわかつた。
(プログラム5)

精神看護のlectureを受け、施設見学に行った。Lectureでは、「患者が地域で生活できるよう3週間で退院させるようにしている」と言っていて、精神

看護が発達しているのかな、と思ったけれど、実際に施設に行くと、皆同じ作業着で、20-30人が同室で柵の中に立っていた。この状態で3週間治療を受けても、地域に適応できるとは思えなかった。

(プログラム5)

2つのラベルは同じ講義・見学についての記述であるにも関わらず、それぞれの記述にみられる認識が異なっている。随行教員に確かめたところ、見学前に大変前向きな理念についての講義があったとのことで、前者のラベルではその講義内容をそのまま受け入れて記述したのではないかと考えられた。精神疾患を持つ患者が回復していくのに、どのような環境が望ましいのかという視点について定まっていない段階の学生のために、講義・施設見学型プログラムを学生の有効な学びにするためには、このような場面での学生の認識を正しく理解し、必要な修正のための支援を行う必要がある。そのためには、看護の知識・経験、学生の学習段階を把握した教員が随行しながら、学生に足りない学習や比較する土台となる知識を埋める補助的な関わりを行うことが必要だと考える。

2) 滞在形態による学生の気づきの比較

企画者側は、家庭生活体験が生活に関する表象像の広がり最大の効果があるだろう、と期待して、プログラム3・4(韓国異文化体験)にはホームステイ体験を盛り込んだ。ラベルの内容から、ホームステイ効果は見られるか、滞在形態によって学生の学びに何か影響があるか、と考え、内容を概観した限り、企画者が期待したほど滞在形態による顕著な気づきの特徴は見られない。項目によっては、どの参加者の意識にもまったくのぼっていない項目もある。さらに各ラベルを読んでみると、例えば食についてのラベルには、家庭生活体験における気づきと外食体験を通じた気づきの2種類があった。例を示す。

家庭生活体験における食に関連した記述例

ホームステイのお母さん(本人のことはおねえちゃんと呼んでいたが)は、子供がこぼした牛乳などをトイレットペーパーを際限なく使ってふいていた。夕食はごはん、カルビ、サンチュ味噌、みそ汁・・・だった。夕食後の片付けで子供が食べおわってない物だけでなく、お皿に残っていたものはすべて捨てていた。すごくもったいない気がした。

(プログラム3)

外食体験による記述例

昼食で、キムチや酢の物などのサイドメニューみたいな皿が10くらいあり、日本のサイドメニューは別料金なのに、韓国はサービスがいいなと思った。また、韓国人の口く、具をご飯とまぜて食べる習慣があると。そのため、サイドメニューが多いのだと思った。

(プログラム4)

ホームステイプログラム(3, 4)における食に関するラベルの分布を見ると、ホームステイを通じた気づきより外食やスーパーでの買い物体験など外出時に得られた気づきが多い(12件中9件)ことがわかった。

生活の表象像の広がりにはホームステイのような家庭生活体験によって得られるものであるし、自己と他者の違いに気付く、あるいは相手の思いを知るとはどういうことか、といった学びには、現地の人々との関わりを持つきっかけとなるホームステイは非常によい環境である。にもかかわらず、回収したラベルにあまりその効果が見られなかった原因は、ホームステイを効果的に活用できていない、あるいはホームステイで直面した事実が意識化されていないことが考えられる。

その他、学びの種類の広がり以外の面から、ホームステイの長所が見られたラベルの例を示す。

仁川空港からホームステイの家の近くまでバスで行った。バスの運転手の携帯が鳴り、バスの運転手は

電話をし始めた。日本では、運転中の携帯使用はだめだと法律であるが、韓国にはそのような法律はないのだと思った。また、一般道路でバスは100km/hのスピードを出したり、ヘルメットをつけずに走るバイクを見て驚き、韓国の法律ってゆるいのかなと思った。
(プログラム4)

↓

1日目に感じた、「韓国では運転中の携帯使用はいいのか。」ということを知ると、本当は携帯を使用しながらの運転を禁止しているみたい。それにもかかわらず、堂々と使用してすごいなと感じた。韓国でもパトロールをしているみたいだが、パトロールをする意味があるのかなと思った。
(プログラム4)

最初のラベルでは、運転中の携帯使用について、「法律がゆるいのかな」と考えているが、後日、ホストファミリーとの関わりで認識が変化している。学生寮やホテルに滞在した場合と比べ、このような目の前の事実についての間違った認識の修正が指導を伴わず起こりうるのがホームステイの利点の1つである。随行教員との補足的コミュニケーションでは「現地についての正しい知識」の提供には限界があるためである。

3 学生の持つ「異文化」認識の種類

目の前の事実を確かに学生が意識化し、記述したラベルの中にも、教員から見て「これは海外体験による気づきなのか？」と感じるラベルもある。その原因を探りながらラベルを読んでいくと、「学生が異文化ととらえているものは何か？」という視点が浮かび上がってきた。学生のラベルには、大きく3つのタイプの「異文化」があることが見えてきた：(1)海外の生活文化と日本の生活文化の違いを異文化ととらえているラベル、(2)学生が日常生活している地域と異なる生活環境に異文化を感じているラベル、

(3)出会ったことのない「個」に直面して、個を異文化としてとらえているラベルである。生活経験のより豊富な教員が「これは海外での気づきなのか？」という疑問を感じたラベルの中には、(2)と(3)の特徴を持つラベルが含まれていることがわかった。以下、具体的なラベルをいくつか例示する。

1) 自分の日常生活の場と異なる生活環境を異文化ととらえている例

下のラベル例は、学生が「海外体験による気づき」としてラベルを書いているのだが、実際は大都市での生活を体験し、心が動いた例である。

ソウル市では、多くの人が地下鉄を利用している。そして、切符の料金も初乗り1000w（日本円にして約100円）ぐらいで安い。が、T-moneyカードを使うと更に100w（約10円）値引きされ、初乗り90円、また乗り換えごとに切符を買わなくていいので、乗り換え時に初乗り料金が加算されない。ほとんどの人がこれを使用していた。また、このT-moneyカードはとても便利で、公衆電話、バス、タクシー、故宮への入場料などいろいろなところで使える。市民にとって本当にありがたいカードだと思った。

(プログラム4)

この例は、認識に問題があるわけではないが、本学の学生は宮崎県を中心に九州出身の学生が多い本学の学生の認識の特徴を表していると考えられる。学生が「海外で心が動いた事実」として記述する内容の中には、このように大都市での生活と地方都市での学生の生活背景を比較して驚きを感じているラベルが多い。学生にとって「異文化」とは海外の文化とは限らない、という例である。

この他にも、大きな都市での生活にある種の異文化を感じ、驚きを感じていると思われるラベルが複数見られた。

地下鉄や道を歩くときに人にぶつかってしまったこ

とがよくあった。思わず日本語を「すみません」と言ったが、ぶつかることが当たり前かのように知らない感じで去っていく。いちいち謝ってはきりがないという認識があるのかなと思った。でも、ぶつかっていかれるのは気分悪いなと思った。

(プログラム 1)

街を歩く人々のスピードや人ごみを歩く感覚は、大きな都市で生活をしてきた学生たちであれば、韓国で心が動いたこととしてこのようなラベルはあがってこなかったかもしれないが、複数の参加者が類似した内容の記述をしている。

2) 出会ったことのない「個」に異文化を感じている例

次のラベル例は、学生がこれまでに直面したことのない「個」を一般化し、異文化を感じた、と考えられる例である。

Wさんの家で、Wさんがたくさんお話をしてくれた。Wさんの話は何でもズバツと率直で素直な感じがしてとっても親しみやすかった。「日本人には本音と建前があるから何を考えているかわからない」とトロハウスで言われた事を思い出して、こういうことかな～と思った。

(プログラム 1)

これは、家庭訪問体験の中でホストの女性のお話を聞いた後、学生が書いたラベルである。このWさんは、テレビの仕事をされていて、レポーター経験もあり、自己表現も生き方も非常に率直で積極的な印象を受ける方だった。この女性との関わりの中で、参加学生たちは彼女の人柄に強い印象を受けた様子だった。さらに、初日に韓国語・韓国文化入門を受講したトロハウス（語学学校）で現地講師がおしゃった日本人のイメージを思い出し、少ない経験をつなぎ合わせて「韓国人の人柄」を一般化しようとしている例であると思われる。このような認識に対しては、日本人の例をあげて「文化か個なのか」

を考える場を与えることにより、学生は自分の思いこみを修正、あるいは少なくとも観察の必要性を感じることができると思う。

次のラベルも、直面したことのない「個」に異文化を感じた、という種類のラベルである。

仁川空港の換金所に行くと韓国人男性が1人いて、男性は私達がいるのにもかかわらず、おならを平気でして驚いた。日本ではおならをすると恥ずかしいという思いがあり、また人前でおならをしないことがマナーであるが、韓国では習慣であるのだと思い驚いた。

(プログラム 4)

前のラベルと違い、このラベルは、負のイメージを与えられた個々の体験が、「その国の習慣」という負の表象像の広がりにつながった例である。ラベル共有の場での「習慣であるのだ、と結論づけたのはどうしてかな？」という問いかけによって、学生が思考の飛躍に気付くコミュニケーションが必要だと思われる。

次のラベルでは、個との関わりがうまくいかなかった場面から、異文化を感じている。

朝、Jちゃんと今日の予定について話をしていた。Jちゃんは「今日、学校が休みだから、駅まで一緒に行くよ。」と言っていたので、出発時間を決めた。しかし、その時間になってもJちゃんは行く準備をしておらず、「今日は行かない。」と言った。一瞬、なんて気ままなんだと思った。後でAさんが、「梨花女子大学との交流の時間はギリギリにならないと決まらないって川北先生が言ってた」と教えてもらい、韓国人は相手の都合を考えないんだなと思った。

(プログラム 4)

この例は、ホストファミリーとの関わりがうまくいかなかった場面について書かれている。なぜうまくいかなかったのか実際の理由はラベルからは分からない。しかし、企画者側の著者が大学交流の時間

の決定について「直前にならないと決まらない」と話したことの記憶とつながって、否定的なイメージで韓国人の人格を一般化しようとしていたことが、ラベルを読んで初めてわかった。

個の体験が異文化像を作り上げてしまうきっかけになるというラベルが見られる一方で、観察される立場に立つ経験をした学生が、次のようなラベルを記述している。

夜のトトロハウスの交流会で日本語のとっても上手な韓国人の男の人としゃべった。彼は、都会の日本人はとっても冷たいといていた。人がたおれていても警察に聴取されるのがいやだから（めんどろ）通報してあげないと言っていた。それは一部分の1人の話だけど、それを日本人とひとまとめにされるんだなと思うと何か悲しかった。（でも、確かに韓国ならすぐ人がかけよりそんな印象だ）

（プログラム1）

この学生は、一部の日本人のあり方を日本人一般の特徴としてとらえられるのは残念だと感じている。観察する側に立つと個々対全体の意識が薄れてしまいがちだが、このように逆の立場のラベルを学生同士共有することで、自らの個々の出会いの中での自分の考え方に「はっ」と気づく学生もいるかもしれない。（ ）内のコメントについて、このラベルを書いた学生本人に確認すると、短い滞在期間の中で、人に道を尋ねたときに目的地にたどり着くまで援助してもらった体験や、階段などで他人の重い荷物を持ってあげる若者の姿をたびたび見かけた体験などから、このコメントを加えた、と説明した。個の特徴なのか、文化なのか、学生自身が意識しているラベルでもあると感じられた。

4 その他の学生の気づきと随行教員の関わり

ラベルの中には、日本と海外の違いに着目しながらも、背景理解が不足しているために、誤った解釈を持った例もある。

今日はエレファントキャンプに行った。料金所の所にカメラ・ビデオetc.ダメですよ。という看板があったにもかかわらず、園内に入ると象使いの人が写真とっていいよ、とジェスチャーと言葉で言ってくれて、たくさん写真をとった。看板の意味ないなーと思った。これもおおらかな性格のタイ人だからかな、と思った。（プログラム2）

この場面で学生が感じた矛盾について、学生はおそらくこれまでにタイ人に対して抱いていたイメージから「おおらかな性格だからかな」と解決しているが、写真をとるのを許してくれるのは象使いの人が個人的に手に入れることのできるチップが目的であることが多い、という背景は知らないため、このような理解になっている。随行教員も現地文化に精通しているわけではないので、必ずしも知識を与えるということではなく、「おおらかな性格だからかな？ どうして禁止されているのに写真を撮らせてくれるのか、タイの人に聞いてみるといいね」などの投げかけが学生の気づきを促すと考える。

次のラベルは、随行教員の判断によるちょっとした仕掛けによって、学生の気づきを引き出した例である。

クーラーつき列車で車内食が出るとはおどろいた。一方で20Bの車両では窓はあけっぱなし、座れたら座る、ペットボトルを集めるおじさん…状況が一変している。貧しい人々のための移動手段であり、リッチな人はきたなくて乗りたがらない列車を体験して、貧富の差を感じながらも、庶民の交通手段が確保されていることは大事だと思った。（プログラム2）

これは、移動のために乗った列車で随行教員が学生を等級の異なる2つの車両に乗せたために、学生の新たな気づき体験を生んだ場面である。随行教員の現地での体験を広げようとする判断は、学生にとってよい気づき体験になることがわかった。

IV 考察

ラベル分布に見られる学生の学びの傾向と個々のラベルの観察を通して、実施するプログラムの型によって異なる種類の課題が見えてきた。

また、学生の実事と異なる認識や行き過ぎた一般化が見られた記述から、海外での体験を体験だけで終わらせず、ラベルの共有を通して認識の確認をすることが学生の学びのために必要な過程であり、随行教員による補助的な関わりは学びの援助になる、と考えた。

講義・施設見学型のプログラムでは、学生の経験・知識の不足が問題になるが、随行教員の補足的関わりによって、学びの機会が活かされることがわかった。講義中、見学中に事実と異なる認識に教員が気づき、修正することは非常に難しいため、特にラベル共有の場を持つことが有益であると考えた。

また、講義・施設見学型プログラムに生活体験から得られる学びを補う方法の1つとして、滞在形態をホームステイにして、講義・見学型プログラムと組み合わせる、という形が考えられる。ところが、滞在形態の効果を概観した結果、ホームステイの機会を与えるだけでは、学生が目前の事実を自立して意識化していない可能性が高い、という結果も得た。学生が目前の事実を意識化し、どのようにとらえているかを確認しあえるラベル共有の場が必要であると考えた。また、現実的には、訪問先によって、ホームステイを組み合わせることが難しいこともあり、その場合も、ラベルの共有の場や随行教員の関わりによって、気づきを補い合うことが学びの幅を広げる助けとなると考える。

異文化体験プログラムも、ただ提供するだけでは学生の生活に関する表象像の広がりにはそれほど見られず、意識化する項目には偏りがあることがわかった。また、意識化して記述した内容にも、認識が事実と異なっているのではないかとと思われるラベルが多く見られた。このことから、異文化体験プログラムにおける随行教員には、問題発生時の援助という役割

以外に、海外体験の中で学生の持てる力を引き出し、学生が自立して気づきにくい目の前の事実の意識化に向けた援助を行い、学生が自己流に描いた認識を修正する、という指導的役割を担うことができるのではないかと示唆を得た。

今回、異文化体験プログラムに含まれていたホームステイから、企画者が期待したような学びの効果が実際には見られなかった点について、以下の改善点が考えられる。

- 1) 学生が現地でホストファミリーと積極的に関わられるよう、事前学習の中でホームステイへ向けたオリエンテーションを重点的に行う。
- 2) 随行教員の補足的コミュニケーションによって、学生の印象にとまらなかつた事実の意識化への援助を行い、事実と異なる、あるいは行き過ぎたとらえ方を修正する。

その他、ホームステイの要素を組み込むことが難しいプログラムでも、ホスト側大学との結びつきを深め、現地での学生同士の交流を深めることによって、「生活に関する表象像の広がり」を促したり、「自己と他者の違い」を意識したり、「相手の思いを知るとはどういうことか」を考える機会になる。また、大学間の結びつきが強くなれば、生活背景の見えるようなプログラム作りへの提案もしやすくなる。国際交流委員会の役割として、具体的なプログラムを学生のよりよい学びの場にするための大学間交流の活性化へ向けた取り組みが課題とされる。

V おわりに

今後、看護大生にとってよりよい学びとなるプログラムを作るには、プログラム構成内容の種類、滞在形態、随行教員の関わりをうまく組み合わせることが必要である。特に、プログラムの中で学生の学びを補うことができる重要な要素が随行教員との補足的コミュニケーションであると考えている。随行教員の「現地指導者」としての役割を明確にして、事前オリエンテーションを行う必要もある。さらに、

資料1 各プログラムの概要

本事業開始当初、学術・教育協定提携大学（韓国：梨花女子大学、タイ：チェンマイ大学、中国：西安交通大学）のある地域の中から異文化体験型プログラムを企画した。以下のプログラムを実施した。その後、チェンマイ大学との間で短期交換留学プログラムを開始したため、プログラム5のみ講義・施設見学型プログラムとなっている。

プログラム1)

第1回韓国短期研修プログラム（実施期間：2007年3月20-27日）
参加者：3名（随任教員1名） 滞在：梨花女子大学学生寮
梨花女子大学看護学科生との交流（4時間程度）
韓国語・韓国文化入門（語学学校主催）
韓国の若者たちとの交流会参加（語学学校主催）
家庭訪問・キムチ/カクテキ作り（半日）
歴史的背景を知る（板門店・博物館・史跡見学・伝統芸能）
人々の生活の場を見て歩く
健康・美容体験： 韓国あかすり・汗蒸幕（サウナ）・エステ体験

プログラム2)

第1回タイ短期研修プログラム（実施期間：2007年3月21-28日）
参加者：4名（学部生2名、大学院生2名）（随任教員1名、他2名の教員が合流） 滞在：ホテル
チェンマイ大学見学と看護学科生との交流（半日程度）
歴史的背景を知る（史跡見学）
人々の生活の場を見て歩く
健康・美容体験： 伝統療法（タイ式マッサージ）体験

プログラム3)

第2回韓国短期研修プログラム（実施期間：2008年3月20-27日）
参加者：2名（随任教員1名） 滞在：ホームステイ
梨花女子大学看護学科生との交流
韓国語・韓国文化入門
韓国の若者たちとの交流会参加
歴史的背景を知る（博物館・史跡見学）
人々の生活の場を見て歩く
健康・美容体験： 韓国あかすり・汗蒸幕（サウナ）・エステ体験

プログラム4)

第3回韓国短期研修プログラム（実施期間：2008年8月31-9月7日）
参加者：3名（随任教員1名） 滞在：ホームステイ
梨花女子大学看護学科生との交流
韓国語・韓国文化入門
韓国の若者たちとの交流会参加
歴史的背景を知る（博物館・史跡見学）
人々の生活の場を見て歩く
健康・美容体験： 韓国あかすり・汗蒸幕（サウナ）・エステ体験

プログラム5)

第2回タイ短期研修プログラム（第1回短期交換留学プログラム） （実施期間：2008年8月30-9月7日）
参加者：3名（随任教員1名） 滞在：チェンマイ大学学生寮
チェンマイ大学での講義・医療施設見学
看護学科生との交流（1週間）
歴史・文化的背景を知る（史跡・寺院・博物館・エレファントキャンプなど）

特に講義・見学型プログラムでは、看護や看護学生の学習段階に理解がある教員が現地指導者として望ましいと考える。

1週間程度の海外研修プログラムではあるが、学生にとっては、普段の生活の場を離れ、海外文化にふれること自体、非常に刺激になる体験となる。仮に1つ1つの事実に対して表現される認識が経験不足のためにずれたものであったとしても、その後の国内外での経験によって認識の修正は繰り返されていくであろう。このような前提も冷静に理解しながら、国際交流委員会として、今後、本学の学生にとって少しでもよい学びになる短期海外研修プログラム作りへ向けた取り組みを重ねていきたい。

本稿は、宮崎県看護学術振興財団の助成を受けた本学国際交流委員会による試験研究助成事業「看護大学生の海外体験から得られる学びについて」（2006-2008年度）の成果を報告するものである。
国際交流委員：川北直子，小笠原広実，遠藤恵美子（2006-2007年度），Eric Larson，小河一敏，
錢淑君

Activity Report

What Nursing Students Learn from Overseas Experiences: — Observations of Students' Notes during Short-term Overseas Programs —

Naoko Kawakita, Hiromi Ogasawara, Emiko Endo, Eric Larson, Kazutoshi Ogoh

【Key words】 nursing university students, short-term overseas program, overseas program types, forms of lodging, chaperones' roles

1) Naoko Kawakita, Hiromi Ogasawara, Eric Larson, Kazutoshi Ogoh : Miyazaki Prefectural Nursing University
2) Emiko Endo : Musashino University